国立西洋美術館所蔵　モーリス・ドニの素描目録

袴田紘代

1959年、松方コレクションがフランス政府より寄贈返還された際、国立西洋美術館が引き継いだモーリス・ドニの作品は全35点、そのうち素描が約半数の18点を占めていたことは意外に知られていない。その後、画家の遺族であるドミニク・モーリス・ドニ氏、ポール・ドニ氏や、ドニと交友のあった久我貞三郎・太郎氏のご遺族から寄贈された作品が6点、さらに購入作品2点が加わり、2017年現在、当館が所蔵するドニの素描は26点を数える。

これら素描全点を一堂に会した「モーリス・ドニの素描」展が、当館の版画素描展示室にて2016年10月から翌年1月にかけて開催された[1]。本論は、同企画に際して行った調査報告であると同時に、簡便ながら国立西洋美術館所蔵のドニの素描目録を目指したものである。

先行する関連研究や今回あらたに実施した調査結果を踏まえ、本素描コレクションの全体的な特色を要約するならば、主として次の2点となるだろう[2]。第一に、独立した作品として鑑賞に堪えうる描き込みがなされた、質の高い素描が多く含まれている点。とくに松方コレクションに含まれる作品の大半は、パリのシャンゼリゼ劇場や個人邸宅の重要な装飾プロジェクトの準備素描をはじめとし、制作動機が明確な完成度の高い大型の習作で構成されている。ここからは、松方幸次郎という重要な顧客に対する、ドニの――そして蒐集の仲介を務めたリュクサンブール美術館およびロダン美術館長レオンス・ベネディットの――配慮がうかがえる[3]。

もうひとつの重要な特色は、これらの素描がドニと日本の関係を物語る資料、ひいては日仏交流史の一端を明らかにする歴史資料としての価値も有している点である。松方による購入作品は言うまでもなく、久我貞三郎のコレクションに由来する寄贈作品も、これに該当する。彼らの蒐集活動は、日本におけるドニ受容の波と軌を一にしており、またそれを促した素地として、ドニ自身が抱いていた日本への関心があった。前者の背景には、ドニが教鞭をとるアカデミー・ランソンで学んだ日本人画学生たちの存在、また同時期に雑誌『白樺』が先導した日本におけるドニの作品紹介がある[4]。その一方で、早くからドニは日本美術に興味を示し、ジャポニスムの一翼を担ったのみならず、自ら浮世絵を蒐集している。ドニの日本文化に対する一定の理解は、在仏日本人の交流を円滑なものとしただろう。

モーリス・ドニの手がけた素描の全貌については、未だ研究の途上にある[5]。当館のドニ素描コレクションの全容を現時点で整理し、公にすることで、今後の素描研究の進展に貢献するところがあればと願う次第である。

［謝辞］
本論執筆にあたり、以下の方々に多くの貴重な情報をいただいた。ここに記して深く感謝申し上げる。
Mesdames Claire Denis, Fabienne Stahl, Marie-Claire Rodriguez（Catalogue raisonné Maurice Denis）, 金澤清恵氏 , 杉山菜穂子氏（三菱一号館美術館）.

国立西洋美術館所蔵モーリス・ドニ素描目録

凡例

原則として年代順とする。装飾画習作の場合は、プロジェクトごとに分類し、プロジェクトの完成時期の早い順に並べる。

作品情報は以下の順で表記する：目録番号、タイトル、制作年、技法、サイズ、国立西洋美術館所蔵番号、銘、来歴、展覧会歴、文献歴。

展覧会歴における略記は以下のとおり：
国立西洋美術館，1981年:モーリス・ドニ展，国立西洋美術館，1981年9月1日–1981年10月18日.
国立西洋美術館，2016年：モーリス・ドニの素描――紙に残されたインスピレーションの軌跡，国立西洋美術館 版画素描展示室，2016年10月15日–2017年1月15日.（展覧会図録刊行せず）

文献歴における略記は以下のとおり：
国立西洋美術館，1961：『国立西洋美術館総目録』東京，国立西洋美術館，1961.
神戸市立博物館，1990：神戸市立博物館編『松方コレクション西洋美術総目録』神戸，「松方コレクション展」実行委員会，1990.

Cat. No. 1

《雌鶏と少女》のためのスケッチ

1890年頃　木炭、鉛筆／紙　36.3×51.2 cm

D. 2011-2
書込み：vert/ sombre/ le vert jaune est/ plus vert/ enfant, tête foncée, gris/ vert jaune, rose pâle, capeline blanche un peu verte,/ tablier vert pâle jaune; 裏面に書込み：Fuyante à Point de Fuite accidental/ Diagonale/ Fuyante à 45 au point à Distance/ ...
来歴：2012年ポール・ドニ氏より寄贈.
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.1.
文献歴：展覧会図録『モーリス・ドニ:いのちの輝き、子どものいる風景』NHK：NHKプロモーション，2011，p.48，fig.11-1，repr.；『国立西洋美術館報』No.46（Apr. 2011-Mar. 2012），2013，新収作品一覧．p.48.

当館が所蔵する油彩画《雌鶏と少女》（fig.1）のためのスケッチで、2012年にドニの遺族から寄贈された。スケッチには油彩画と同じ正面を向いた子どもの全身像のほか、斜め後ろから見た全身像、肩から頭部、右腕、手、足などが個別に描かれ、ドニの模索の跡が窺える。

子どもの足元には色彩に関して以下の書き込みがある。「暗い緑／黄緑はいっそう緑である／子ども、暗い色の頭部、灰色／黄緑、薄いピンク、少し緑がかった白い帽子／黄色がかった薄い緑のエプロン」。油彩画において、暗い緑色の上に、いくつかの緑色のヴァリエーションを配する意図があったのかもしれない。

本作の裏面には、壺や台座、また幾何学的な図形や計算式がメモ書きされており、美術学校での課題に関係したものと推察される。

Cat. No. 2

《池のある屋敷》

1897年頃　油彩／紙　34.0×37.4 cm

D.1981-1
来歴：1981年ドミニク・モーリス・ドニ氏より寄贈.
展覧会歴：国立西洋美術館所蔵フランス素描名作展：版画素描展示室改装記念，国立西洋美術館 版画素描展示室，2001年3月27日–2001年6月24日；国立西洋美術館，2016年，no.17.
文献歴：『国立西洋美術館年報』No.16（1981），1983，新収作品目録．pp.22-23，repr.

本作は画家の子息であるドミニク・モーリス・ドニ氏によって1981年に寄贈さ

れ、その折に油彩によるオイル・スケッチとして素描に分類された。本作がもとづくクロッキー（個人蔵）との関係から1897年頃の作とされる。1890年代のドニの作品には、リズミカルに林立する樹木や、画面を蛇行して延びる小道、ヴェールを被った人物が歩む姿がしばしば認められる。本素描もそのような系譜に連なる作品であろう。

Cat. No. 3

《アーサー王》

1898-1903年頃（?）　ペン、黒インク／紙　8.0×32.5 cm

D.1983-1
来歴：J. P. L. Fine Arts, London；1983年国立西洋美術館協力会より寄贈.
展覧会歴：素材と表現：国立西洋美術館所蔵作品を中心に，国立国際美術館，1997年4月17日–1997年6月22日，cat. no. 44；風景――国立西洋美術館素描コレクションより，国立西洋美術館　版画素描展示室，2013年3月2日–2013年6月2日，［24］；国立西洋美術館，2016年，no.16.
文献歴：『国立西洋美術館年報』No.18（1983），1986，［作品解説］. p.6，新収作品目録. pp.16-17，repr.

ドニと交友のあった作曲家エルネスト・ショーソンによるオペラ『アルテュス王（アーサー王）』にちなんで制作された素描。描かれているのは、アルテュス王と王妃ジェニエーヴル（グィネビア）であろう。

オペラはショーソンの死後、1903年11月にブリュッセルのモネ劇場（ベルギー王立歌劇場）で初演された。本素描の第二ヴァージョン（個人蔵）が1899年から1900年に制作された素描と同じ台紙に貼られて保存されていることから、同時期の制作とみなされる。制作動機としては、オペラのプログラムあるいはリブレットの挿絵という可能性や、1899年にショーソンが事故で他界したため中断された出版計画があったのかもしれない。ただし、造形様式の面では、1890年代前半の作品に散見される線のアラベスクを特徴としており、またショーソンがすでに1880年代後半から『アルテュス王』の構想を練っていたことも考え合わせると、1890年代前半に制作された可能性も否定しがたい。

Cat. No. 4

《フィエーゾレの受胎告知》のための習作

1907年　木炭、パステル／紙　48.0×62.0 cm

D.1959-20　松方コレクション
左下に署名：MAURICE DENIS
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還.
展覧会歴：国立西洋美術館，1981年，cat. no. 132；所蔵水彩・素描展――松方コレクションとその後，国立西洋美術館　版画素描展示室，2010年2月23日–2010年5月30日，cat. no. 27；国立西洋美術館，2016年，no. 14.
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-117；神戸市立博物館，1990，cat. no. 567.

1907年に描かれた油彩画（現存せず）の習作とされる素描[6]。同じ人物像が、1919年に制作された《フィエーゾレの受胎告知》（油彩、個人蔵、fig.2）において聖母マリアに祝福を告げる大天使ガブリエルとして登場する。この油彩画の背景には、ドニ一家がしばしばショーソン一家とともに過ごしたフィレンツェ近郊フィエーゾレの別荘「ベッラ・ヴィスタ荘」から臨む風景が描かれている。

Cat. No. 5-8

ステルン邸装飾画「フィレンツェの宵」のための習作4点

美術愛好家で自身も芸術を嗜み、詩人でもあったシャルル・ステルンは、パリの邸宅を改装するにあたって複数の画家や家具作家を招集した。ドニは画家エルネスト・ローランの紹介で1908年にステルンと知り合い、翌年11月7日に客間の天井を飾る装飾パネルの制作を受注、画家ジョスエ・ガボリオーを助手として1910年7月に完成させ、同年のサロン・ドートンヌに出品している。ステルン邸には1910年末に設置された[7]。

当初は4点の大型台形パネルと同数の小型台形パネルが交互に配されて客間を飾っていたが、そのうちの3点のパネル――《水浴する女たち》(fig.3)、《カンタータ》(fig.4)、《詩》(fig.5)が現在パリ市立プティ・パレ美術館に所蔵されており、残りの5点の所在は不詳である。

いずれのパネルも厳格な左右対称性のもとに構成され、ドニがイタリア旅行で感銘を新たにしたルネサンスの巨匠、ラファエロの影響を窺わせる。くわえて、古典的なキアロスクーロの手法も人体表現に取り入れられている。色彩はステルンからの求めで抑制のきいた色味にまとめられた。

ボッカチオの『デカメロン』を出発点としながら、ドニはそれまでの装飾画でも好んで取り上げた音楽や水浴のテーマをトスカーナ地方の風景のなかで展開させている。人物には当世風の装いを纏わせ、中世と現代の要素を混在させることで、作品を特定の時代から解き放ち、普遍的な性格を与えたといえよう。

Cat. No. 5

「フィレンツェの宵」より《水浴する女たち》のための習作

1910年　木炭、パステル／紙　52.0×69.0 cm

D.1959-17 松方コレクション
右下に署名と年記：MAVD 1910
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還.
展覧会歴：所蔵水彩・素描展――松方コレクションとその後，国立西洋美術館　版画素描展示室，2010年2月23日–2010年5月30日，カタログ外参考出品；国立西洋美術館，2016年，no.2.
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-114；神戸市立博物館，1990，cat. no.564.

年記から1910年の制作と分かる。素描の下部に描かれた腕を上げる二人の女性像が、《水浴する女たち》(fig.3)のパネルで水盤から流れ落ちる水を浴びている左手の女性二人に対応する。

Cat. No. 6

「フィレンツェの宵」より《水浴する女たち》、《カンタータ》のための習作

1910年頃　木炭、パステル／紙　65.0×73.5 cm

D.1959-16 松方コレクション
左下に署名：MAURICE DENIS; 中央下に書込み：ETUDE POUR LA COUPOLE DE CH. S.
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還.
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.3.
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-113；神戸市立博物館，1990，cat. no.563.

素描の画面左端で白布を羽織ろうとする女性は、《水浴する女性たち》(fig.3)の前景(左から二人目)に描かれた女性にあたる。また、素描の右端で本あるいは楽譜を手に歌う女性は、《カンタータ》(fig.4)の前景で合唱する女性たちのうち、右から二人目の人物に対応する。造形様式や素材の類似から、《水浴する女たち》の習作(Cat. No. 5)と同時期の制作と推察される。

Cat. No. 7

「フィレンツェの宵」より《カンタータ》のための習作

1909-10年　木炭、パステル／紙　45.5×65.5 cm

D.1959-31 松方コレクション
左下に署名:MAURICE DENIS
来歴:松方幸次郎;1944年フランス政府接収;1959年フランス政府より寄贈返還.
展覧会歴:国立西洋美術館,1981年,cat. no.133;国立西洋美術館,2016年,no.4.
文献歴:国立西洋美術館,1961,P-128;神戸市立博物館,1990,cat. no.578.

《カンタータ》(fig.4)の画面右に描かれた合唱する女性たちの頭部習作とされる。ただし、髪型の一致をのぞいて完成作との図像上の類似は認められず、「フィレンツェの宵」のために描かれながら採用されなかったオイル・スケッチの1点と考えられる。

Cat. No. 8

《マルト・ルシの肖像》

1909-10年　木炭、パステル／紙　58.0×37.5 cm

D. 1959-28 松方コレクション
右上および右下に署名:MAVD; Maurice Denis
来歴:松方幸次郎;1944年フランス政府接収;1959年フランス政府より寄贈返還.
展覧会歴:国立西洋美術館,1981年,cat. no. 143;国立西洋美術館,2016年,no.21.
文献歴:国立西洋美術館,1961,P-125;神戸市立博物館,1990,cat. no.575.

マルト・ルシの肖像。1909年より、ドニはルシ家の姉妹(マルト、ジョルジェット、マドレーヌ)を描いた。マルト・ルシは「フィレンツェの宵」に登場する複数人の女性のモデルとなっている。本素描がそのまま完成作に採用されたわけではないが、とりわけ《詩》(fig.5)の右手前の人物は髪型や服装が近い。

Cat. No. 9-12

ベルティエ邸装飾画「黄金時代」のための習作4点

1910年、ドニは美術商ウジェーヌ・ドリュエを通じてアレクサンドル・ベルティエを紹介された。ベルティエは彼の愛人が住むパリの住居内の階段装飾をドニに依頼する。1911年1月17日にドリュエからベルティエに宛てられた書簡には、ドニが装飾画制作を3,000フランで受注したことが記されており、1912年6月17日付けに請求書が発行されていることから、およそこの期間内に装飾画が制作されたことが分かる[8]。

　ベルティエ家はナポレオン1世の時代に功績をあげてワグラム公爵位を授与された名家であり、アレクサンドルもまた軍務に就くが、文学や美術に造詣

の深かった彼は絵画蒐集にも情熱をそそぎ、ドニの他にもルノワールやシニャック、ルドン、ヴュイヤール、ドラン、ヴァン・ドンゲンをはじめとした同時代作家の作品も多数購入した。

ドニは装飾画の制作にあって神話に想をえた「黄金時代」というテーマを発案し、5点の主要パネル——《浜辺》(fig.6)、《渓谷》(fig.7)、《鳩》(fig.8)、《葡萄棚》(fig.9)、《泉》——と1点の天井画、2点の扉上および窓上装飾(《果物》、《鳥》)を構想する。《渓谷》パネルはイタリアのティヴォリの風景に、《浜辺》パネルは1908年にドニが購入した別荘「シランシオ荘」近くのブルターニュの海岸に取材している。

同時期に着手されたシャンゼリゼ劇場の装飾(Cat. No. 13-16を参照)に比べ、私邸装飾の「黄金時代」は、鑑賞者が自ずと限定されるがゆえに画家が抱く理想郷のイメージを色濃く反映している。ドニの別荘があったブルターニュ地方を思わせる浜辺、女性と子供が戯れるユートピアとしての神話的情景、そこに重ねられるイタリア旅行で目にした風景、バラ色と水色のやわらかいコントラスト—いずれもドニの作品に馴染み深いモティーフと色彩感覚である。一時これらの装飾画は散逸の危機にさらされたが、現在主要パネル5点がフランスのオワーズ県立美術館にまとまって収蔵・展示されている。

Cat. No. 9

「黄金時代」より《浜辺》のための習作

1903-12年　木炭、パステル／紙　75.9×50.0 cm

D.1959-26 松方コレクション
右下および左上に署名:MAURICE DENIS; MAVD
来歴:松方幸次郎;1944年フランス政府接収;1959年フランス政府より寄贈返還.
展覧会歴:国立西洋美術館,1981年,cat. no. 136;国立西洋美術館,2016年,no.6.
文献歴:国立西洋美術館,1961,P-123;Marie-José Salmon, *L'âge d'or de Maurice Denis*, cat. exp., Musée départemental de l'Oise, 1982, cat. no. 87, non exposée, p.50, repr.;神戸市立博物館,1990,cat. no.573.

《浜辺》(fig.6)の装飾パネルの前景左下に描かれた女性に対応する素描。画面中央左手には、片手を耳元にあてる女性の後ろ姿が胸部より上部のみ木炭で粗描されている。モデルの身体にみずみずしい量感を与える黄色や黄緑、オレンジ色のハイライトが完成作においても踏襲されているのが見て取れる。1903年に制作された《白い馬のいる浜辺》(油彩、個人蔵)にも、同じ女性像が後ろを向いた姿勢のまま登場していることから、本作は「黄金時代」の構想前に描かれていた可能性がある。しかしながら、様式的には1911年作の《渓谷》のための習作(Cat. No. 12)に近く、「黄金時代」の構想にあたって同じ姿勢のモデルを描き直したとも考えられる。

Cat. No. 10

「黄金時代」より《葡萄棚》のための習作

1905-12年　木炭、白チョーク／紙　84.0×49.0 cm

D.1959-27 松方コレクション
右下に署名:MAVD

来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：国立西洋美術館，1981年，cat. no.137；国立西洋美術館，2016年，no.8.
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-124；Marie-José Salmon, *L'âge d'or de Maurice Denis*, cat. exp., Musée départemental de l'Oise, 1982, cat. no.92, non exposée, p.36, repr.；神戸市立博物館，1990，cat. no.574.

《葡萄棚》（fig.9）で葡萄を摘み取ろうとしている女性二人に対応する。この二人の女性像は、「黄金時代」が描かれる以前の1905年に、同じく《葡萄棚》と題された別の油彩画（所蔵先不詳）にすでに登場していた。もともと同油彩画のために本素描が用意され、のちに「黄金時代」で若干の変更をくわえて再度用いられることとなったのかもしれない。果実に手を伸ばす少女を女性が抱きかかえる構図は、人物を縦方向に並べることを可能にし、縦に細長い装飾画のフォーマットに適した構図となっている。

現在、同構図の習作2点の存在が確認できる。一方は1905年の油彩画のために描かれた習作（個人蔵）、もう一方は「黄金時代」のために描かれ、パネルに転写するため格子状に罫線の引かれた習作である（サン=ジェルマン=アン=レ、モーリス・ドニ美術館蔵）[9]。

Cat. No. 11

「黄金時代」より《鳩》のための習作

1910-12年　木炭、パステル／紙　74.5×50.0 cm

D.1959-25 松方コレクション
左下に署名：MAURICE DENIS
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.7.
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-122；Marie-José Salmon, *L'âge d'or de Maurice Denis*, cat. exp., Musée départemental de l'Oise, 1982, cat. no.89, non exposée, p.35, repr.；神戸市立博物館，1990，cat. no.572.

《鳩》のパネル（fig.8）で、男性から鳩の巣を受け取ろうと腕をのばす女性に対応する素描。完成作では、結われていた髪がほどかれるなど変更が見られるが、黄色と水色を基調とした身体のハイライトは引き継がれている。画面左上には、両腕を頭の後ろに回す女性の胸像がうっすらと描かれている。同じく《鳩》の女性像を描き、格子状の罫線が引かれた習作が、モーリス・ドニ美術館からオワーズ県立美術館に寄託されている[10]。

Cat. No. 12

「黄金時代」より《渓谷》のための習作

1911年　木炭、パステル／紙　75.5×50.0 cm

D.1959-24 松方コレクション
右下に署名と年記：MAVD. 1911
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.5.
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-121；Marie-José Salmon, *L'âge d'or de Maurice Denis*, cat. exp., Musée départemental de l'Oise, 1982, cat. no.90, non exposée, p.34, repr.；神戸市立博物館，1990，cat. no.571.

《渓谷》パネル（fig.7）中央部で背後に手を回して立ち、画面左に座る羊飼いの笛の音に耳をすませる二人の裸婦のうち、右手に描かれた人物にあたる。

髪型などの細部にいたるまで、ほぼ忠実に完成作に描き写されている。

Cat. No. 13-16

シャンゼリゼ劇場装飾画「音楽史」のための習作4点

パリにあるシャンゼリゼ劇場で現在も目にすることができる装飾画「音楽史」は、ドニの装飾画家としての評価を高めた代表作である。建築家オーギュスト・ペレによって設計され、ガブリエル・トマとガブリエル・アストリュックによって起工、1913年に落成したこの劇場は、ファサードや室内の装飾のために多くの画家を起用した。ドニのほかにもアントワーヌ・ブールデル、エドゥアール・ヴュイヤールやケル=グザヴィエ・ルーセル、くわえてアンリ・ルバスクやジャクリーヌ・マルヴァルが携った。

ドニが任されたのは、丸天井の下部を環状にめぐるフリーズ部の装飾パネルと、舞台周囲の浮彫およびエクセドラのグリザイユ画装飾である。とりわけ天井画は劇場装飾の要といっても過言ではなく、ドニの気概が窺える。全体のサイクルが「音楽史」と呼ばれるこの天井装飾は、《ギリシャの舞踏》、《歌劇》、《交響曲》、《抒情劇》と題された大きな横長の主要パネルによって構成され、それぞれのパネルは左・中央・右の3点の部分パネルの接合で成り立つ。この4点の各主要パネルの間に挟まれるかたちで、同数の円形画《コーラス》、《オーケストラ》、《オルガン》、《ソナタ》が配されている。古代の神々や歴史的な作曲家の肖像、また彼らの作品を表す擬人像や当時の歌手、バレエダンサーらが一堂に会するこのフリーズ画は、西洋音楽史の流れと諸概念を凝縮した、一種の歴史絵巻といえるだろう。公的な建築装飾にふさわしく、各パネルの構図や人物の造形にはアングル以来の古典的原理がみとめられる。

この天井装飾のための準備作として、転写用の素描（モーリス・ドニ美術館蔵）やマケット（オルセー美術館ほか蔵）などが現存し、準備素描も合わせて50点近く存在する[11]。当館所蔵作品の制作年の特定は容易ではないが、第十マケットが劇場の取締役会で承認を経てパネル画の制作が本格的に開始されるまでの期間、すなわち1912年の前半頃と推察される[12]。パネル制作にあたっては、複数の画家が助手を務めた[13]。

Cat. No. 13

「音楽史」より《ギリシャの舞踏》のための習作

1912年頃　木炭／紙　91.0×44.5 cm

D.1959-14 松方コレクション
左下に署名と書込み：MAVRICE DENIS Etude pour le theatre
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還.
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.9.
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-111；神戸市立博物館，1990，cat. no.561.

《ギリシャの舞踏》左パネル（fig.10）に描かれたディオニソスのための下絵。ギリシャ神話に登場する葡萄酒の神、つまり酩酊と陶酔の象徴でもあるディオニソスの祭儀は、ギリシャ演劇の起源に関わるといわれ、音楽史の源に位

置づけられる重要なモティーフである。完成作では毛皮を羽織って頭部には葉冠をかぶり、左手で聖杖（テュルソス）を掲げ、右手を女性（クレタ王ミノスの娘アリアドネ）とつないで踊る姿に仕立てられている。

Cat. No. 14

「音楽史」より《交響曲》のための習作

1912年頃　木炭、パステル／紙　75.0×52.9 cm

D.1959-22 松方コレクション
右下に署名と書込み：MAURICE DENIS / Etude pour la 9ème Symphonie, théatre
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴:国立西洋美術館，1981年，cat. no.135:所蔵水彩・素描展――松方コレクションとその後，国立西洋美術館　版画素描展示室，2010年2月23日–2010年5月30日，cat. no.28；国立西洋美術館，2016年，no.10．
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-119；神戸市立博物館，1990，cat. no.569．

画面の左下に「第九交響曲のための習作」と書き込まれていることからも、《交響曲》中央パネル（fig.11）の左側に描かれた、ベートーヴェンの第九交響曲を擬人化した女性像の下絵であることが分かる。完成作において、本女性像の左隣で片腕を上げるギリシャ風衣装の男性像こそ、作曲家本人、すなわちベートーヴェンの肖像となっている。この女性像は、現在オルセー美術館に所蔵される《鳩と女性》（油彩、制作年不詳）にも見出すことができる。

Cat. No. 15

「音楽史」より《ギリシャの舞踏》のための習作（ナターシャ・トゥルアノヴァの肖像）

1912年頃　木炭、パステル／紙　75.5×50.0 cm

D.1959-30 松方コレクション
左下に署名と書込み：MAURICE DENIS DANSE DU GÉNIE STATUE GRECQUE DU REPOS ETERNEL
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：［巡回展］国立西洋美術館所蔵　松方コレクション展，長崎県立美術博物館，1970年10月18日–1970年11月15日，cat. no.20；［巡回展］国立西洋美術館所蔵　松方コレクション展，富山県民会館美術館，1971年10月2日–1971年10月24日，cat. no.18；［巡回展］国立西洋美術館所蔵　松方コレクション展，長野県信濃美術館，1972年10月12日–1972年11月5日，cat. no.19；国立西洋美術館，1981年，cat. no.138：国立西洋美術館，2016年，no.11．
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-127；神戸市立博物館，1990，cat. no.577．

ロシア人バレリーナ、ナターシャ・トゥルアノヴァをモデルにして描かれた素描で、《ギリシャの舞踏》中央パネル（fig.12）に描かれた三美神のための初期の構想。トゥルアノヴァはシャンゼリゼ劇場のプロジェクトのほかに、装飾画「ナウシカの戯れ」（1913-14年、個人蔵）のためにもモデルをつとめ、ドニは彼女のデッサンを多く残している[14]。

画面左下の書き込みのなかに「永遠の休息のギリシャ彫像」とあり、人物のポーズがルーヴル美術館に所蔵される古代ギリシャ彫刻《ナルシス》、別称《マザランのヘルマフロディトス》、《永遠の休息の象徴像》のそれに由来することを示している。

本作に近似した女性像としては、1924年制作の《森の中のイヴ》（油彩、87×111 cm、個人蔵）に描かれたイヴがあげられる。ただし本素描は1921年には松方が購入してベネディットに預けられていたため、ドニは《森の中の

イヴ》の制作にあたり、ベネディットから一時的にこの素描を借り戻したか、あるいは本素描のヴェリアントが存在し、それを参照したのかもしれない。

Cat. No. 16

「音楽史」より《歌劇》のための習作（ジャンヌ・ロネーの肖像）

1912年頃　木炭、パステル／紙　75.5×51.0 cm

D. 1959-15 松方コレクション
左下に署名と書込み：MAVRICE DENIS Etude d'après Madame Jeanne Raunay
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：［巡回展］国立西洋美術館所蔵　松方コレクション展，長崎県立美術博物館，1970年10月18日–1970年11月15日，cat. no.19；［巡回展］国立西洋美術館所蔵　松方コレクション展，長野県信濃美術館，1972年10月12日–1972年11月5日，cat. no.20；国立西洋美術館，2016年，no.22．
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-112；神戸市立博物館，1990，cat. no.562．

著名な歌手であったジャンヌ・ロネーをモデルに描かれた素描で、《歌劇》中央パネル（fig.13）の左側に登場する人物に呼応する。彼女が扮するのは、18世紀の大作曲家グルックの歌劇『オーリードのイフィジェニー』に登場するヒロイン、イフィジェニー（イピゲネイア）。グルックの歌劇はエウリピデスの悲劇にもとづくラシーヌの戯曲を原作とし、アガメムノンとクリテムネストラの娘イフィジェニーが、許婚のアキレウスによって生贄となる運命から救われる物語。《歌劇》中央パネルでは、本素描と人物の向きが左右反転して描かれている。

Cat. 17-18

挿絵本『エロア：天使たちの妹』のための習作2点

1917年にパリのル・リーヴル・コンタンポラン（現代図書）社より出版されたこの挿絵本は、ロマン派の詩人アルフレッド・ド・ヴィニーの詩集『古今詩集』（1826-37年）より抄出された「エロア」の詩編をテキストとして収める（fig.14）。テキストの間には、この詩に想をえたドニの下絵にもとづき、ジャック・ベルトランが版刻した木版画挿絵がさし挟まれている。

キリストの涙から生まれ、憐れみの心をもった天使エロアは、ひとりの美しい堕天使を救おうとするあまり、悪の犠牲となる。この悲劇的でありながら甘美な物語が、限られた色数の木版画によって夢幻のように描き出されている。『エロア』の出版は1917年だが、ドニは1908年頃からすでに挿絵の構想を抱いていたようだ[15]。本作は妻マルトが病床に伏している時期に手掛けられたためか、宗教的な精神にもとづく内省的な色合いが濃厚な作品となっている。

Cat. No. 17

『エロア』のための習作（1）

1917年以前　木炭、パステル／紙　50.0×81.2 cm

D.1959-18 松方コレクション
左下に署名と書込み：MAURICE DENIS Etudes pour Eloa
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：国立西洋美術館，1981年，cat. no.139；国立西洋美術館，2016年，no.12．

文献歴：国立西洋美術館，1961，P-115；神戸市立博物館，1990，cat. no.565.

画面左上方に描かれた女性像は、書籍31頁（fig.15）の横たわる堕天使を見つめるエロア、中央のうつ伏せで両手を広げる女性は65頁（fig.16）で天を離れて堕天使のもとへ下りゆくエロアに対応する。その上方に描かれた、上半身を屈めながら左腕を後ろに持ち上げる女性と、下方に描かれた、右ひじを上げて仰向きに寝そべる女性は、前者が牧神として、後者は野に寝そべる堕天使の姿となって、いずれも40頁（fig.17）に登場する。

Cat. No. 18

『エロア』のための習作（2）

1917年以前　木炭、パステル／紙　50.5×84.0 cm

D.1959-19 松方コレクション
右下に署名と書込み：MAURICE DENIS Etudes pour Eloa
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：国立西洋美術館，1981年，cat. no.140；国立西洋美術館，2016年，no.13.
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-116；神戸市立博物館，1990，cat. no.566.

画面上段で水がめを持つ女性像は、書籍の27頁（fig.18）に水を汲みに来た村娘として現れ、その左隣のヴェールを持ち上げる女性は53頁（fig.19）のエロアとして登場する。下段の左端に描かれる両腕を頭上で組んだ女性は35頁（fig.20）の堕天使に誘惑されるエロアに、下段中央で右手を頬にあてた女性は17頁（fig.21）のエロア、その左隣の裸婦は62頁（fig.22）の暗雲に身を横たえる堕天使に対応する。さらに、下段の顔の前で両手を握り合わせる全身像は59頁（fig.23）の天に戻ろうとするエロアとなって、下段右端の女性は同頁のエロアを引き留めようと腕を伸ばす堕天使となって現れる。

Cat. No. 19

サン・ポール聖堂ステンドグラス《聖ジャンヌ・ド・シャンタル》のための習作

1917年頃　木炭、パステル／紙　65.0×41.0 cm

D.1959-29 松方コレクション
右下に署名と題名：MAURICE DENIS Etude pour Ste Jeanne de Chantal
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：［巡回展］国立西洋美術館所蔵　松方コレクション展，高知県立郷土文化会館，1973年10月28日–1973年11月25日，cat. no.19；［巡回展］国立西洋美術館所蔵　松方コレクション展，福岡県文化会館，1974年10月13日–1974年11月10日，cat. no.19；［巡回展］国立西洋美術館所蔵　松方コレクション展，佐賀県立博物館，1974年11月16日–1974年12月1日，cat. no.19；国立西洋美術館，1981年，cat. no.142；国立西洋美術館，2016年，no.15.
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-126；神戸市立博物館，1990，cat. no.576.

ジュネーヴのサン・ポール聖堂に設置されたステンドグラス（fig.24）のための習作。ドニは同聖堂のために聖パウロの生涯をテーマとした壁画を手掛けたほか、ジュネーヴや近隣地域にゆかりのある聖人を表した14点のステンドグラスの下絵制作を担った[16]。本作はそのうちの1点で、16世紀から17世紀初頭にかけてディジョンに生きた聖女ジャンヌ・ド・シャンタルを描いたもの。ドニは1917年よりデザインをはじめ、マルセル・ポンセとシャルル・ヴァセムの協力を得て1922年に全点を完成させた。

Cat. No. 20

《タンバリンを持つ女性（ナターシャ・トゥルアノヴァ?）》

1912年（?）　木炭、パステル／紙　75.5×50.0 cm

D. 1959-21 松方コレクション
右下に署名：MAURICE DENIS
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.20．
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-118；神戸市立博物館，1990，cat. no.568; Delphine Grivel, *Maurice Denis et la musique*, Lyon, Symétrie, 2011, p.131, repr.

モデルや制作動機について確証を欠くものの、《ギリシャの舞踏》のための習作（Cat. No. 15）のモデル、ナターシャ・トゥルアノヴァの肖像として1912年に描かれたとする説がある[17]。制作年代の厳密な特定は難しいが、松方が購入した1921年を上限として設定できる。

Cat. No. 21

《うずくまる女性》

1921年以前　木炭、パステル／紙　36.0×25.0 cm

D.1959-23 松方コレクション
右下に署名：MAURICE DENIS
来歴：松方幸次郎；1944年フランス政府接収；1959年フランス政府より寄贈返還．
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.19．
文献歴：国立西洋美術館，1961，P-120；神戸市立博物館，1990，cat. no.570．

ドニは本素描をもとに複数の絵画を制作している。とりわけ、バテシバのシリーズの第1作である、《ヴィラ・メディチの庭のバテシバ》（油彩、190×231 cm、サン=ジェルマン=アン=レ、モーリス・ドニ美術館所蔵）と関連づけられる。

Cat. No. 22-25

久我家の肖像画4点

以下の肖像画4点は、フランス三菱商事の初代社長として1922年から1927年にかけて渡仏した久我貞三郎氏（1886-1959年）のコレクションに由来する。これらを受け継いだ御子息の久我太郎氏ご遺族から、ほか5点の作品とともに2014年、当館に寄贈された。

モネやマティス、また福島繁太郎や藤田嗣治、正宗得三郎ら日仏の画家たちと交流した貞三郎氏は、松方幸次郎とも親交を結び、画廊巡りをともにした一人である。久我家とドニとの関係のはじまりは、元フランス首相クレマンソーの紹介でモネを訪ねた貞三郎氏が妻田鶴子氏の絵の指導を願い出たところ、その頃視覚障害を患っていた画家が代わりにドニを薦めたことが契機と言われる。やがて久我家とドニ一家は家族ぐるみで親しい付き合いをする仲となり、その交流のなかでこれら久我一家の肖像画が生み出された。穏やかな表情でとらえられた家族の肖像画には、ドニがモデルに向けた親しい感情が反映されている。

いずれの作品も久我家がサン=ジェルマン=アン=レのドニ邸の近隣に滞在した1925年の夏頃に描かれたものと考えらえる。実際に、《久我太郎の肖像》（Cat.

No. 24）や、《久我夫妻の肖像》（Cat. No. 25）には署名の横に「1925」の年記が認められるのみならず、ドニの遺族のもとに残される作品売立・寄贈台帳には、1925年のところに「パステルによる、久我家の子どもたちと両親の肖像画」と記されており、同年には貞三郎がこれら肖像画をドニから購入していたことが窺える[18]。

Cat. No. 22

《久我貞三郎の肖像》

1925年頃　パステル／紙　33.5×24.8 cm

D.2014-2
右下に署名：MAU.DENIS
来歴：2014年久我貞三郎氏，太郎氏御遺族より寄贈．
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.24．
文献歴:展覧会図録『モーリス・ドニ:いのちの輝き、子どものいる風景』NHK：NHKプロモーション，2011，p.180，fig.1，repr. color；『国立西洋美術館報』No.49（Apr. 2014 - Mar. 2015），2016，陳岡めぐみ．新収作品．pp.22-25，新収作品一覧．p.26，repr.

本作に描かれる久我貞三郎の肖像は、そのまま水彩画に置き換えられ、隣に田鶴子の肖像を伴うかたちで《久我夫妻の肖像》（Cat. No. 25）にも登場する。久我貞三郎をほぼ同じ姿で描いたもう1点のパステル画の存在が知られており、1981年の当館でのドニ展に出品されている[19]。

丁寧なタッチで描かれ、モデルの左頬から顎、さらに顎から首にかけて、黄色のハイライトと水色の陰影を巧みに組み合わせたヴォリューム表現がなされている。

Cat. No. 23

《久我田鶴子の肖像》

1925年頃　パステル／紙　32.9×26.1 cm

D.2014-3
右下に署名：MAVD.DENIS
来歴：2014年久我貞三郎氏，太郎氏御遺族より寄贈．
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.23．
文献歴：展覧会図録『モーリス・ドニ：いのちの輝き、子どものいる風景』NHK；NHKプロモーション，2011，p.180，fig.2，repr. color；『国立西洋美術館報』No.49（Apr. 2014 - Mar. 2015），2016，陳岡めぐみ．新収作品．pp.22-25，新収作品一覧．p.26，repr.

モデルとなった久我田鶴子はドニに絵画の手ほどきを受けていた。当館に所蔵される水彩画《モネと太郎》（1926年頃、水彩／紙、REF.2014-1）も彼女が描いた作品のひとつである[20]。

《久我貞三郎の肖像》（Cat. No. 22）の場合と同様、《久我夫妻の肖像》（Cat. No. 25）に描かれた田鶴子の肖像と図像的に一致する。豊かな黒髪をゆったりとまとめ、青い服にターコイズのネックレスという装いの田鶴子の肖像は、切れ長の目と見事な曲線を描く眉、きりりと結ばれた口元が品位ある表情を生み出している。

Cat. No. 24

《久我太郎の肖像》

1925年　パステル／紙　33.5×24.8 cm

D.2014-4
銘文：A Madame T. Kuga / respectueux homage / Maurice Denis 1925
来歴：2014年久我貞三郎氏，太郎氏御遺族より寄贈．
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.25．
文献歴：『国立西洋美術館報』No.49（Apr. 2014 - Mar. 2015），2016，陳岡めぐみ．新収作品．pp.22-25，新収作品一覧．p.26，repr.

久我貞三郎・田鶴子夫妻の長男として1923年にフランスで生まれた太郎をモデルにしており、《モネと太郎》（REF.2014-1）に描かれている子どもと同一人物である。画面左下に、「久我夫人へ／敬意をこめて／モーリス・ドニ 1925」と記されていることから、1925年に制作された、当時2歳頃であった太郎の肖像と分かる。ドニは本作を田鶴子に捧げているが、これは母親としての夫人に対する敬意に根差しているのであろう。聖母子を想起させる慈愛に満ちた母子像を数多く描いたドニにとって、母性は画業を通して重要なテーマのひとつでもあった。太郎の切れ長の目と眉には凛々しさと大人びた雰囲気がただようが、ふっくらとした頬、上向いた鼻頭、開き気味の小さな口に子供らしい表情が宿っている。本作は、太郎と妹の伊佐於の二人をモデルとした水彩による肖像画（個人蔵）の、太郎の肖像と図像が一致する。

Cat. No. 25

《久我夫妻の肖像》

1925年　水彩／紙　35.9×43.4 cm

D.2014-5
左下に署名：Maurice Denis 25; 右下に署名：MAVD
来歴：2014年久我貞三郎氏，太郎氏御遺族より寄贈．
展覧会歴：国立西洋美術館，2016年，no.26．
文献歴：『国立西洋美術館報』No.49（Apr. 2014 - Mar. 2015），2016，陳岡めぐみ．新収作品．pp.22-25，新収作品一覧．p.26，repr.

水彩による久我貞三郎（右）と妻の田鶴子（左）の肖像画。ドニのパステルによる各人の肖像画（Cat. Nos. 23，24）に図像上一致する。細筆による緻密なモデリングが特徴的であり、黄色がかった肌に青色で影をつける補色を意識した配色は、ドニの油彩による人物表現に通じるものがある。

画面左下、田鶴子の右肩のあたりに筆で記された「Maurice Denis 25」との書き込みから、1925年の制作が裏付けられる。

Cat. No. 26

《レマン湖畔、トノン》

1941-1942年頃　鉛筆、水彩、グワッシュ／紙　18.0×31.0 cm

D.1983-2
来歴：J. P. L. Fine Arts, London; 1983年国立美術館協力会により寄贈．
展覧会歴：素材と表現：国立西洋美術館所蔵作品を中心に，国立国際美術館，1997年4月17日–1997年6月22日，cat. no.45；［版画素描展示］風景――国立西洋美術館素描コレクションより，国立西洋美術館　版画素描展示室，2013年3月2日–2013年6月2日，［03］；国立西洋美術館，2016年，no.18．

文献歴：国立西洋美術館年報. No.18（1983）, 1986,［作品解説］. p.6, 新収作品目録. pp.16-17, repr.

ドニは1941年から1942年にかけてトノンに滞在した。本作は、トノン=レ=バンにあるシャブレ美術館に所蔵される油彩画の習作（《トノンの夕べ、公園》1942年頃、厚紙に貼られたカンヴァスに油彩、30.5×55.5 cm）で、もとはクロッキー帳の1ページであった。画面左には聖ボン教会が描かれている。

［1］「モーリス・ドニの素描――紙に残されたインスピレーションの軌跡」、国立西洋美術館　版画素描展示室、2016年10月15日−2017年1月15日。

［2］松方コレクション中のドニの素描に関しては、1981年の国立西洋美術館におけるドニの回顧展において比較的まとまって展示されたが、図録に記載された作品情報には改訂すべき箇所が散見される（『モーリス・ドニ展』国立西洋美術館、1981）。その後、2005年に横溝（横井）麻子氏がまとめた報告書によって作品情報の改訂が進み（横井麻子『松方コレクションにおけるモーリス・ドニの素描』未刊行報告書）、2008年には杉山菜穂子氏が、松方とベネディットの書簡を中心とした一次資料を扱う調査によって、これらの素描の購入経緯も明らかにしている。（杉山菜穂子「モーリス・ドニと日本：松方幸次郎とレオンス・ベネディット：国立西洋美術館所蔵　松方コレクションのドニ作品購入経緯に関する資料紹介」『国立西洋美術館研究紀要』12号、2008）。

［3］松方はベネディットの仲介により、1921年に美術商ウジェーヌ・ドリュエからドニの素描20点を2,000フランで購入しており、当館が所蔵する素描はここに含まれる。Cf. 杉山菜穂子、前掲載論文、2008、p.30。

［4］日本におけるドニ作品の受容に関しては以下に詳しい：杉山菜穂子「日本におけるモーリス・ドニ」『美術フォーラム21』23号、2011、pp.81-85および杉山菜穂子「ドニと交流した日本人」、展覧会図録『モーリス・ドニ：いのちの輝き、子どものいる風景』NHK：NHKプロモーション、2011、pp.178-180。

［5］近年の研究成果としては、例えば以下の素描展が挙げられる：Agnès Delannoy, *Maurice Denis dessinateur : L'Œuvre dévoilé*, cat. exp., Paris, Somogy Éditions d'art ; Saint-Germain-en-Laye, Musée départemental Maurice Denis, 2006.

［6］Jean-Paul Bouillon, *Maurice Denis*, Genève, Skira, 1993, p.155.

［7］装飾パネルは第一次大戦前夜、ステルンがスイスへ移住するため取り外されてアルフレッド・ヴァロットンが引き取り、1937年にはドニ自身が主要パネル3点を手に入れてパリ市立プティ・パレ美術館に引き渡した。Cf. *Maurice Denis (1870-1943)*, cat. exp., Paris, Editions de la Réunion des musées nationaux, 2006, cat. no.108.

［8］Marie-José Salmon, *L'âge d'or de Maurice Denis*, cat. exp., Beauvais, Musée départemental de l'Oise, 1982, p.14.

［9］2点の習作については以下を参照：*Ibid*, cat. nos.18, 19.

［10］同習作については以下を参照：*Ibid*, cat. no.20.

［11］Thérèse Barruel et Claude Loupiac, *1913 : le Théâtre des Champs-Élysées*, cat. exp., Paris, Ministère de la culture et de la communication ; Éditions de la Réunion des musées nationaux, 1987, p.82.

［12］マケットが劇場の取締役会に提出されたのは1911年12月28日、その後図像に関していくつかの改変が加えられ、パネルの制作は1912年の4月から7月の間とされる。*Ibid*, pp.75-77.

［13］ドニが教鞭を執っていたアカデミー・ランソンの生徒ルイ・ブケとジャンヌ・ド・サントや、長年ドニの助手を務めてきたアルベール・マルティーヌ、「フィレンツェの宵」の制作にも携わったジョスエ・ガボリオーらがパネル制作に参加した。

［14］ナターシャ・トゥルアノヴァについては以下を参照：Delphine Grivel, *Maurice Denis et la musique*, Lyon, Symétrie, 2011, pp.129-130.

［15］Maurice Denis, *Journal*, t. II, p.93.

［16］ドニが手がけたステンドグラスに関しては以下に詳しい：Myriam Poiatti, *L'église de Saint-Paul Grange-Canal, Genève*, Berne, Société d'Histoire de l'Art en Suisse, 2001, pp.28-32.

［17］Grivel, *op.cit.*, p.130.

［18］« Portraits enfants et parents Kuga avec pastels », *Carnet de dons et ventes*, no.1226.（ドニの遺族蔵、未刊行資料）この台帳からは、久我が家族の肖像画のほかにも複数のドニ作品を1925年から1927年の間に購入していることが分かる。現在埼玉県立近代美術館に所蔵される油彩画《シャグマユリの聖母子》（1925年）もそのなかの1点である。

［19］展覧会図録『モーリス・ドニ展』国立西洋美術館、1981、cat. no.141。

［20］同構図の油彩画（《モネの肖像》）が現在、マルモッタン美術館に所蔵される。2014年に当館情報資料センターへ寄贈された同構図の1926年5月24日付の写真が、これらの油彩、素描のもととなったと推測されている。

Cat. No.1
《雌鶏と少女》のためのスケッチ

（表面右）

（表面左）

（裏面）

Cat. No.2
《池のある屋敷》

Cat. No.3
《アーサー王》

Cat. No.4
《フィエーゾレの受胎告知》のための習作

Cat. No.5
「フィレンツェの宵」より《水浴する女たち》のための習作

Cat. No.6
「フィレンツェの宵」より《水浴する女たち》、《カンタータ》のための習作

Cat. No.7
「フィレンツェの宵」より《カンタータ》のための習作

Cat. No.8
《マルト・ルシの肖像》

Cat. No.9
「黄金時代」より《浜辺》のための習作

Cat. No.10
「黄金時代」より《葡萄棚》のための習作

Cat. No.11
「黄金時代」より《鳩》のための習作

Cat. No.12
「黄金時代」より《渓谷》のための習作

Cat. No.13
「音楽史」より《ギリシャの舞踏》のための習作

Cat. No.14
「音楽史」より《交響曲》のための習作

Cat. No.15
「音楽史」より《ギリシャの舞踏》のための習作
（ナターシャ・トゥルアノヴァの肖像）

Cat. No.16
「音楽史」より《歌劇》のための習作（ジャンヌ・ロネーの肖像）

Cat. No.17
『エロア』のための習作（1）

Cat. No.18
『エロア』のための習作（2）

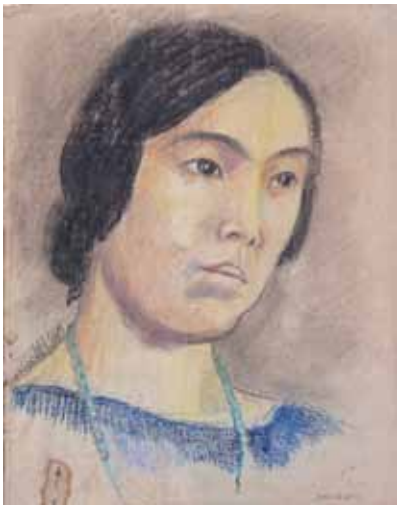
Cat. No.19
サン・ポール聖堂ステンドグラス《聖ジャンヌ・ド・シャンタル》のための習作

Cat. No.20
《タンバリンを持つ女性（ナターシャ・トゥルアノヴァ?）》

Cat. No.21
《うずくまる女性》

Cat. No.22
《久我貞三郎の肖像》

Cat. No.23
《久我田鶴子の肖像》



Cat. No.24
《久我太郎の肖像》

Cat. No.25
《久我夫妻の肖像》

Cat. No.26
《レマン湖畔、トノン》

fig.1
《雌鶏と少女》1890年　油彩／カンヴァス　134.5×42.5cm
国立西洋美術館（P.1986-1）

fig.2
《フィエーゾレの受胎告知》1919年　油彩／カンヴァス　110×160cm
個人蔵　©Catalogue raisonné Maurice Denis

fig.3
「フィレンツェの宵」より《水浴する女たち》1910年　油彩／カンヴァス
218×210/362cm　パリ市立プティ・パレ美術館
© Petit Palais / Roger-Viollet

fig.4
「フィレンツェの宵」より《カンタータ》1910年　油彩／カンヴァス
213×212/364cm　パリ市立プティ・パレ美術館
© Petit Palais / Roger-Viollet

fig.5
「フィレンツェの宵」より《詩》1910年　油彩／カンヴァス
213×204/358cm　パリ市立プティ・パレ美術館
© Petit Palais / Roger-Viollet

fig.6
「黄金時代」より《浜辺》1912年
油彩／カンヴァス 570/437×205cm
オワーズ県立美術館
© MUDO – Musée de l' Oise / Jean-Louis Bouché

fig. 7
「黄金時代」より《渓谷》1912年
油彩／カンヴァス 260×206cm
オワーズ県立美術館
© MUDO – Musée de l' Oise / Jean-Louis Bouché

fig. 8
「黄金時代」より《鳩》1912年
油彩／カンヴァス 424×109cm
オワーズ県立美術館
© MUDO – Musée de l' Oise / Jean-Louis Bouché

fig. 9
「黄金時代」より《葡萄棚》1912年 油彩／カンヴァス 424×109cm オワーズ県立美術館
© MUDO – Musée de l'Oise / Jean-Louis Bouché

fig.10
「音楽史」より《ギリシャの舞踏》左パネル（1913年刊『芸術と装飾 *Art et décoration*』誌 掲載図版）

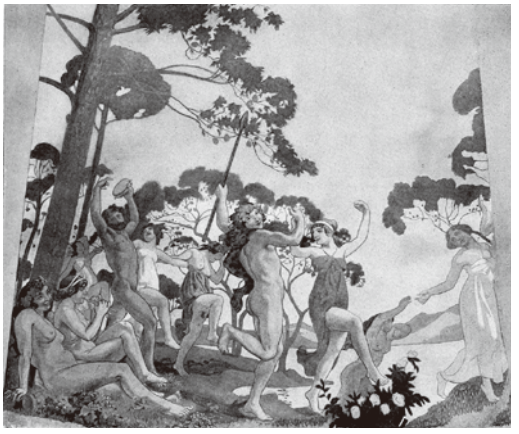


fig.11
「音楽史」より《交響曲》中央パネル（1913年刊『芸術と装飾 *Art et décoration*』誌 掲載図版）

fig.12
「音楽史」より《ギリシャの舞踏》中央パネル（1913年刊『芸術と装飾 *Art et décoration*』誌 掲載図版）

fig.13
「音楽史」より《歌劇》中央パネル（1913年刊『芸術と装飾 *Art et décoration*』誌 掲載図版）

fig.14
挿絵本『エロア：天使たちの妹』扉頁

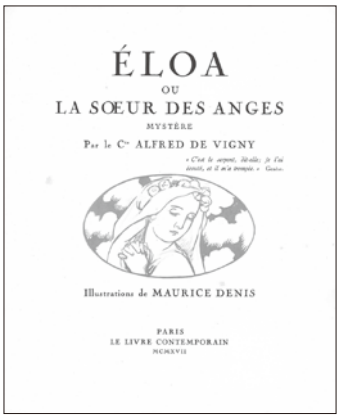


fig.15
『エロア』31頁

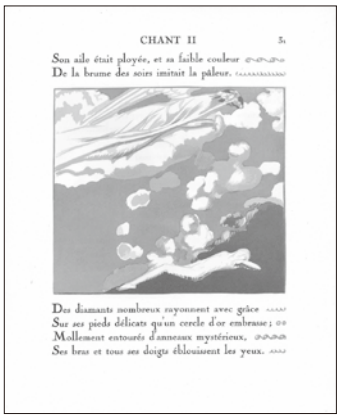


fig.16
『エロア』65頁

fig.17
『エロア』40頁

fig.18
『エロア』27頁

fig.19
『エロア』53頁

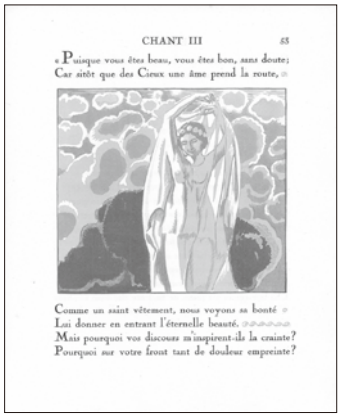


fig.20
『エロア』35頁

fig.21
『エロア』17頁

fig.22
『エロア』62頁

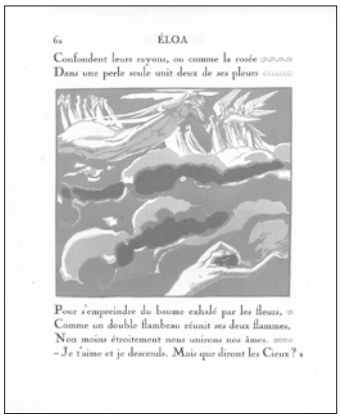


fig.23
『エロア』59頁

fig.24
サン・ポール聖堂のステンドグラス《聖ジャンヌ・ド・シャンタル》

Catalogue of the Maurice Denis Drawings in the NMWA Collection

Hiroyo Hakamata

As is well known, in 1959 the French government returned the Matsukata Collection – artworks acquired by Kôjirô Matsukata (1965-1950) in Europe during the inter-war years – to the people of Japan. It is less known that the part of the Matsukata Collection received by the NMWA included a total of 35 works by Maurice Denis (1870-1943), with 18 drawings constituting more than half of that number. Later two of Denis' children, Dominique Maurice Denis and Paul, and the descendant of a Japanese friend, Teizaburô Kuga and his son Tarô Kuga, donated a further six drawings, and the NMWA in turn purchased two more. Thus as of 2017, there are a total of 26 drawings by Denis in the NMWA collection.

An exhibition of all of these drawings was presented in the NMWA Prints and Drawings Gallery from October 2016 through January 2017. This article is both a report on the survey of the drawings made during preparations for that exhibition, and while basic in format, a catalogue of the Denis drawings in the NMWA collection.

Based on the results of that survey, two elements can be indicated as overall characteristics of this drawings collection. First, many of these drawings are of high quality, with workmanship that indicates they could be viewed as independent works of art in their own right. In particular, the majority of the Denis drawings in the Matsukata Collection consist of highly finished study works with clear production motives, such as the preparatory drawings for important decorative panel projects, for example those for the Théâtre des Champs-Élysées. This characteristic reflects the care that Denis took towards his important client Kôjirô Matsukata, and by extension, towards the collector's intermediary, Léonce Bénédite (1859-1925), Director of the Musée du Luxembourg and curator at the Musée Rodin in Paris.

The other important characteristic is that these drawings are materials that speak of Denis' connection with Japan, and indeed can be valued as historical materials that clarify one element of the history of Franco-Japanese cultural interchange. This goes without saying for the drawings purchased by Matsukata himself, but it also applies to the works donated from the Teizaburô Kuga collection. The collection activities of these two men align with how Denis was received in Japan, and further, Denis' own interest in Japan can also be seen as the basis for Japan's interest in him. Japanese painters studied at the Académie Ranson where Denis himself taught, and at the same time, the magazine *Shirakaba* led the introduction of his works in Japan. Conversely, Denis was interested in Japanese art from an early stage, not only was he a Japonisme proponent he also collected *ukiyo-e* works. It would seem that Denis' certain degree of understanding about Japanese culture would have facilitated his interactions with the Japanese then in France.

Studies have yet to be conducted on the overall nature of Maurice Denis' drawings. It is my hope that by cataloguing, and making public information about the NMWA Denis drawings collection, we will be able to contribute to future research on these works.